

2024/4/28

ルカの福音書 講解メッセージ③

『ルカの福音書 1章 48-79節 マリヤの祈り』

「主はこの卑しいはしために目を留めてくださったからです。ほんとうに、これから後、どの時代の人々も、私をしあわせ者と思うでしょう。力ある方が、私に大きなことをしてくださいました。その御名は聖く、そのあわれみは、主を恐れかしこむ者に、代々にわたって及びます。主は、御腕をもって力強いわざをなし、心の思いの高ぶっている者を追い散らし、権力ある者を王位から引き降ろされます。低い者を高く引き上げ、飢えた者を良いもので満ち足らせ、富む者を何も持たせないで追い返されました。」(ルカ 1:48-53)

「いやしいはしため」とは、「罪人」ということです。神と人との接点は、私たちの罪にあります。神は罪人に目を留めてくださるのです。イエス・キリストがこの地上に来られたのは、私たちに罪があるからです。自分が罪人であることを認め、神との接点を喜ぶことができる人は幸いです。マリヤはそのことに気づいていました。

そして、マリヤは神の恵みを「大きなこと」と告白しています。神は、私たちに対しても大きなことをしてくださっています。それは、永遠のいのちです。これに勝る大きなことはありません。

放蕩息子のたとえ話は、神と接点があるのは誰かということを教えています。罪深い弟が無条件で神に受け入れられると、一生懸命父に仕えていた兄は弟に嫉妬し、一生懸命働いたのにご褒美がもらえないと言って腹を立てました。それに対して父は、「私はいつもお前と一緒にいる」と答えています。兄はすでに永遠のいのちが与えられていることに気づいていなかったのです。

私たちは人と自分を見た目で比べ、祝福されているとか、何もできないとか言ってしましますが、神はあなたと常に共におられます。主は共におられる、永遠のいのちが与えられている、キリストの体の器官として組み込まれている、誰も神の愛から私たちを引き離すことはできない——これが、神が私たちにしてくださった大きなことなのです。

また、「主を恐れかしこむ者」とは神の前にへりくだる者であり、「心の思いの高ぶっている者」とは理性での納得を求める者と言えます。それは、理性が求めるものさ

しは因果関係であり、因果関係で解くことができない問題については、人は勝手に想像して高ぶるからです。たとえば、世界の始まりと死後について因果律で解くことはできません。自分が経験できないことは想像するしかなく、私たちは勝手に想像した内容について勝手なことを言って高ぶるのです。

主が心の高ぶっている者を追い散らした様子を、ヨブ記に見ることができます。つぶやくヨブに向かって神は、「お前は、私が天地を創造したのを見たことがあるのか、何をつぶやいているのか」と語りかけます。神について勝手に想像して勝手に論じる、これが私たちの思いの高ぶりの根本になります。

私たちは、自分の理性には限界があることを認め、経験できないことについては信じるしかない存在です。つまり、理性においてつまづくことが、真の信仰を生み出すと言えます。理性で行き詰まり、神のことばを信じるしかないという心境に行き着くことで、真の信仰に到達するのです。

「権力ある者」とは、この世界において存在価値が認められている者のことです。自分の行いで存在価値を手にした者を、神はそこから引きおろします。なぜなら、あなたの存在価値は、神が定めるものだからです。あなたの存在価値は、あなたの行いではなくイエス・キリストにあるのです。

神が定めた存在価値は、「私がぶどうの木であなたは枝である」と言われたとおり、あなたはキリストのからだの一部であるということです。すなわち、あなたの価値はイエス・キリストなのです。そこに自分で築いた価値を持ち込んではいけません。自分で自分の価値を築こうとすることは愚かなことです。「栄華を極めたソロモンでさえもこの花の一つほどにも着飾っていない」と、イエス・キリストは言われました。この世の価値など、神の前では無であり、神が貸し出したいのちの価値を忘れてはなりません。私たちの価値は不変です。そこに何も付け加える必要はありません。何ができるかではなく、あなたがキリストにあるということが、あなたの価値です。マリヤはそのことを知っていたのです。

「主はそのあわれみをいつまでも忘れないで、そのしもベイスラエルをお助けになりました。私たちの父祖たち、アブラハムとその子孫に語られたとおりです。」(ルカ 1:54-55)

この世は「罪には罰」という価値観を持っています。ですから、自分に何ができるかを誇ると同時に、悪いことをしたら罰があると思っ込んでいます。しかし、神の考えは「罪にはあわれみ」です。そのあわれみはとこしえに変わることはありません。

私たちが、人間的標準でキリストを知ろうとするとつまづきます。神は、人間的標準に収まる方ではありません。なぜなら、神は愛だからです。

なぜ神は私たちの罪をあわれむのでしょうか。イエス・キリストは、十字架の上で「彼らは何をしているのかわからないのだから、彼らを赦してほしい」と祈りました。それは、罪が病気だからです。悪魔のしわざによって入り込んできた死による病気です。悪魔のしわざによって死が入り込み、それによって神との関係が分断され、神に愛されている自分が見えなくなって、人は不安になり、それゆえに見える安心をむさぼろうとして、愛される自分を目指そうとするわけです。それは、「人を愛しなさい」と教える神の律法に、まったく逆らう生き方です。ですから、罪なのです。

そういうわけで、アダムとエバが悪魔に欺かれた結果、死が入り込んだことによって、人は罪人になりました。神がこの地上に来たのは悪魔のしわざを打ち壊すためです。つまり、神は、私たちの罪をいやし、救うために来られたのですから、絶対に私たちを見捨てることはありません。神は人へのあわれみを忘れることなどあり得ないのです。

「マリヤは三か月ほどエリサベツと暮らして、家に帰った。さて月が満ちて、エリサベツは男の子を産んだ。近所の人々や親族は、主がエリサベツに大きなあわれみをおかけになったと聞いて、彼女とともに喜んだ。」(ルカ 1:56-58)

マリヤとエリサベツの様子から、クリスチャンが共に集まり、励まし合っている様子がわかります。マリヤにとってエリサベツは、神のことばを語ってくれる信仰の友です。私たちには、クリスチャン同士、お互いに励まし合える信仰の友が必要です。

✠ バプテスマのヨハネの誕生

「さて八日目に、人々は幼子に割礼するためにやって来て、幼子を父の名にちなんでザカリヤと名づけようとしたが、母は答えて、「いいえ、そうではなくて、ヨハネという名にしなければなりません」と言った。」(ルカ 1:59-60)

神は私たちに名前を与えてくれています。黙示録には、次のように記されています。

「耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。わたしは勝利を得る者に隠れたマナを与える。また、彼に白い石を与える。その石には、それを受けの者のほかはだれも知らない、新しい名が書かれている。」(黙示 2:17)

神が語る「勝利を得る者」とは、この世で勝利を得る者ではなく、自分の罪を認められる人のことです。自分の弱さを認められる人が、勝利を得る者なのです。それは、隠れたマナが与えられているからです。隠れたマナとは神のことばです。神の前に罪を言い表すと神は赦してくださり、神のことばが食べられるようになります。つまり、自分の罪を認めることができれば、神はその罪を赦し、御言葉が食べられるようになって、勝利を得る者となるのです。

白い石は、罪が白紙になったことを表しており、新しい名は、過去と決別した証です。過去が白紙になった証です。それは、自分の弱さを承認できたということです。

これが福音です。見えるところはどうであっても、見えない世界ではそういうことが行われているのです。

「彼らは彼女に、「あなたの親族にはそのような名の人はいりません」と言った。そして、身振りで父親に合図して、幼子に何という名をつけるつもりかと尋ねた。すると、彼は書き板を持って来させて、「彼の名はヨハネ」と書いたので、人々はみな驚いた。すると、たちどころに、彼の口が開け、舌は解け、ものが言えるようになって神をほめたたえた。そして、近所の人々はみな恐れた。さらにこれらのことの一部始終が、ユダヤの山地全体にも語り伝えられて行った。聞いた人々はみな、それを心にとどめて、「いったいこの子は何になるのでしょうか」と言った。主の御手が彼とともにあったからである。」(ルカ 1:61-66)

神は、ザカリヤにもヨハネという名を示していました。夫婦に同じ思いを与えておられます。そして、この話はすぐにユダヤ地方に広まりました。

✠ 聖霊の働き

「さて父ザカリヤは、聖霊に満たされて、預言して言った。」(ルカ 1:67)

預言とは、未来を占うことではありません。神のことばを預かって伝えることです。聖書が教える預言の賜物とは、聖書のことばを解き明かし、人々に伝えることです。つまり、福音を語るのはすべて聖霊の働きであり、預言です。

「しかし、助け主、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、また、わたしがあなたがたに話したすべてのことを思い起こさせてくださいます。」(ヨハネ 14:26)

これが聖霊の働きです。最初の聖霊の働きは、イエスを主と告白できることです。キリストを主と教えてくださり、神から預かっていることを思い起こさせてくださいます。つまり、聖書を読むことができるのも、人に伝えることができるのも、すべて聖霊様が助けてくださっているからできることです。

聖書は、御霊の賜物について次のように語っています。

「愛を追い求めなさい。また、御霊の賜物、特に預言することを熱心に求めなさい。」(I コリント 14:1)

当時は、みんなが聖書を持っているわけでもなく、読める人も多くありませんでした。ただ小さい時から覚え続けている御言葉を、聖霊の助けによって理解していたのです。聖霊の助けによって神のことばを解き明かすこと、つまり預言することを熱心に求めなさいということです。

自分が苦しい時、御言葉が心に浮かんで助けられることも預言です。人ではなく、神からの答えを受け取ることが大切なのです。何が必要か、神が思い起こさせてくださいます。これが人にとって最も重要な働きになるので、熱心に求めなさいと言われているのです。

「あなたがたの場合も同様です。あなたがたは御霊の賜物を熱心に求めているのですから、教会の徳を高めるために、それが豊かに与えられるよう、熱心に求めなさい。」(I コリント 14:12)

御霊の賜物は教会の徳を高め、教会を建て上げるためのものです。誰かを批判したりさばいたりするためのものではありません。今、私たちは神のことばを自由に読むことのできる時代に生きています。日々主と交わり、御言葉を積極的に食べ、教会を

建て上げ、聖霊の助けによって神のことばを伝えていきましょう。聖霊が助けてくださいますから、何を語るか心配しないで伝道していきましょう。

「しかし、聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。」(使徒 1:8)

✠ ザカリヤの預言

「さて父ザカリヤは、聖霊に満たされて、預言して言った。「ほめたたえよ。イスラエルの神である主を。主はその民を顧みて、贖いをなし、救いの角を、われらのために、しもベダビデの家に立てられた。古くから、その聖なる預言者たちの口を通して、主が話してくださったとおりに。この救いはわれらの敵からの、すべてわれらを憎む者の手からの救いである。主はわれらの父祖たちにあわれみを施し、その聖なる契約を、われらの父アブラハムに誓われた誓いを覚えて、われらを敵の手から救い出し、われらの生涯のすべての日に、きよく、正しく、恐れなく、主の御前に仕えることを許される。幼子よ。あなたもまた、いと高き方の預言者と呼ばれよう。主の御前に先立って行き、その道を備え、神の民に、罪の赦しによる救いの知識を与えるためである。これはわれらの神の深いあわれみによる。そのあわれみにより、日の出がいと高き所からわれらを訪れ、暗黒と死の陰にすわる者たちを照らし、われらの足を平和の道に導く。」(ルカ 1:67-79)

ザカリヤは聖霊に満たされ、旧約聖書から御言葉を引用し、神のことばの意味を解き明かしました。

これが預言です。ザカリヤは聖霊に教えられて、旧約聖書の御言葉の意味が理解できたのです。

ぜひ、あなたも聖霊に満たされて神のことばを語りましょう。神のことばは私たちが生かし、勇気づける者です。あなただけでなく、あなたの友人をも勇気づけることができます。何を語るかを心配することはありません。祈るなら、何を語ればよいかは神が導いてくださいます。

「また、人々があなたがたを、会堂や役人や権力者などのところに連れて行ったとき、何をどう弁明しようか、何を言おうかと心配するには及びません。言うべきことは、そのときに聖霊が教えてくださるからです。」(ルカ 12:11-12)

聖霊が語らせてくださいますから、勇気をもって福音を語り、御言葉をもって互いに励まし合って生きていきましょう。このようにして教会の徳を高めていくこと、それが預言の賜物です。